

若狭歴史民だより

創刊号
1992

ごあいさつ

若狭は、近畿圏に属し「民俗学の宝庫」で、寺に宮に、そしてまた、木に鳥に、その伝説はくっついています。

例えば、木にくっついたのは上中町熊川の得法寺の「家康の腰かけ松」です。織田信長の家来の頃の徳川家康が朝倉攻略の途次得法寺に泊まり、境内の松の木に腰かけたという伝説です。

ところで、総てそうだというわけではありませんが、伝説とは歴史的事実が花咲いたものと私は考えたがり、この伝説は、若狭が越前の朝倉家に対抗していたという歴史的现实による伝説と思っています。

「花咲翁」では、翁が灰をまいて花を咲かせます。これは、酸性土壌をアルカリ性に中和させるには灰が一番大切だ、と翁さんは語っているのです。

考古学は、土の中から歴史的现实を発掘しますが、私は昔話から詩人的直感でそれを発掘しようとしています。

若狭は、山幸海幸神話から肇^{はじま}るのですが、この社は何故に遠敷地区にあるのでしょうか。山幸彦と海幸の海神の女王豊玉姫は子どもさえ儲けながら合祀されず、彦神社と姫神社は1キロ余りも隔^{へだ}たっています。私は、この二つの疑問をずっと持ちつづけていました。最近、松永地区の天神山で大和政権の前方後円墳が発掘されたと知って、私はハッとこの宮が遠敷にあるわけと1キロ離れているわけを直感しました。

若狭には、一万年ばかり前、縄文人が海からやってきて津（港）を中心に住んでいました。石の文化の海幸たちです。ところが、今から千七百年ぐらい以前鉄の兵器をふりかざす大和政権が出現し、離れた若狭へ山を越えて攻めこんできました。

鉄の兵器を持つ山幸軍団は、石の兵器の海幸軍の領地にぐんぐん侵略し、古墳時代には遠敷地区がその『国境』となったのです。縄文人の魂は縄文人の領土に、弥生人の魂は弥生人の領地にといいことで、そこで社が一キロばかり離れたわけです。

そして、海幸の代表の魂を王女に、山幸の魂を彦としたのは、出雲神話と同じく両軍団は決戦せず、遠敷地区で和睦（結婚）したことの証でしょう。

私たちは直感に終わらせず、学問的に伝説を解明したいものです。楽しい事業です。

平成4年10月1日

福井県立若狭歴史民俗資料館
館長 山本和夫

古代寺院の実像－若狭を中心に－

京都国立博物館 久保智康

はじめに

現代に生きる私たちにとって、仏教寺院はどのような意味をもっているだろうか。もちろん人それぞれの思いがあるはずだが、あえて単純化すれば、つぎのような二面性が指摘できよう。寺院は、個人個人の願い事をする場（祈願道場）と、自らの罪を悔い亡父母や祖先などの霊を弔う場（滅罪道場）といういずれかの性格を持つ。一つの寺院がこれらの二面的性格をもつこともある。また視点を変えれば、寺院は信仰の場で、その具体的実践行としての「布施」が重視されるが、それが実質的な寺院の経営基礎となり、さらに人々の心に「被収奪感」をもたせるような状況も生じうる。つまり、「信仰」と、全く次元の異なる「経済」が背中合わせになっているという二面性も考えられる。

一体このような寺院の性格は、歴史を溯っていった時に、どこまでたどることができるのだろうか。仏教寺院は、誰が何のために建立し経営していったもので、また民衆に対してはどのような役割を担ったのか。若狭にはじめて仏教寺院が登場した古代の事情を考える際にも、このような問題意識をもつならば、本講座も遠い過去の話ではなく、一層身近な話題として受け取っていただけたらと思う。

1 仏教の伝来と寺院建立の開始

宣化天皇3年(538)、百済の聖明王が仏像・経論などを朝廷に献上したとする『元興寺伽藍縁起』の記事をもって、日本に仏教が公に伝わったものとされる。しかし、瓦葺の塔や金堂など伽藍を構える本格的な寺院は、半世紀後の崇峻天皇元年(588)に蘇我馬子が建て始めた飛鳥寺が最初である。仏教活動が成立する要件として、教理(経典)、僧尼、仏像、寺院と、これらをささえる社会的階層などが挙げられるが、仏教公伝から飛鳥寺完成(609)までは、これらが十分整っていない時期といえるだろう。

蘇我稲目は、仏像・経典を小墾田の家に安置し、向原の家を浄めてこれを寺としたという(『日本書紀(以下『紀』)』欽明天皇13年(552))。また子の馬子は、仏像を祀るため邸の東に仏殿を営み、また石川の宅にも仏殿を営んだ(『紀』敏達天皇12年(583))。これら飛鳥寺建立以前の記事に見られる仏教は、瓦も葺かず私宅を寺とすることから「草堂仏教」などと呼び、対して百済から来た寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工など技術者集団により瓦葺堂塔が成立して以降を「伽藍仏教」と呼ぶことがあるが、瓦葺でない寺院を考古学的に確認することは難しく、「草堂」の実態が不明瞭であるから、上の呼称を飛鳥寺を画期とする時期概念として用いることはやや問題がある。

それはともかく、初期の仏教への関心は、皇室や蘇我氏などの個人的な願いが中心だったようで、たとえば用明天皇元年(586)、天皇が法隆寺建立を発願したのも、病氣平癒が目的であった(法隆寺薬師如来像光背銘)。推古天皇の時代、聖徳太子の治政下になると、仏・法・僧、三宝興隆が詔されたように、朝廷が公に仏教を奨励し、諸臣による寺院建立は加速して、推古天皇32年(624)には、寺が46所、僧816人、尼569人、合わせて1,385人という状況だったという(『紀』)。

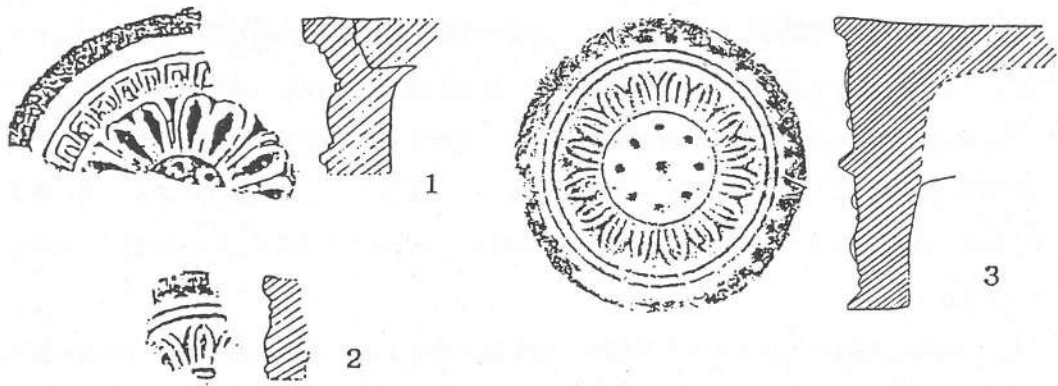
大化の改新と呼ばれるクーデターを経て7世紀後半になると、朝鮮半島で新羅の脅威が増すという外交上の背景もあって、齊明天皇6年(660)に護国經典を誦する仁王般若会が開かれるなど、仏教により国家安泰をはかるという現実政策的な目的が強まりだし、天武・持統朝には一層明確となった。それとともに、国が建立・経営する官寺が増えてきたことも重要である。仏教はここに至って、少なくとも政策上は、私的仏教から国家仏教へと変貌を遂げたように見える。しかし、個々の寺院の成立と展開は、それとはやや次元を異にしたあくまで個別の事情のもとに理解しようとする努力も忘れるべきではないだろう。

2 地方寺院の成立

畿内以外の地方に寺院が増えだすのは、白鳳時代と呼ばれる7世紀後半のことである。とりわけ天武・持統朝を中心とする時期、7世紀第4四半期はそのピークである。持統天皇6年(692)に、勅によって天下の諸寺を計らせたところ545カ寺を数えたといひ(『扶桑略記』)、前記、推古32年の記事と単純に比較して10倍以上にのぼっている。

このような状況の背景には、前述した政府の仏教政策があったことは疑いないが、これらの寺院を主として営んだ各地の有力豪族側の事情は、といえば、大化の改新いらい私地私民を禁止された豪族層が、私寺を営むことで、政府の経済援助や山野・田畑の実質的所有を得ようとしたものという考え方がある。もっとも、伽藍造営事業は多大の費用・資材・技術・人を必要としたはずであり、各地の初期寺院がある程度の定型化した配置をとる瓦葺伽藍であったこと考えると、それは、単に政策上、経済上の理由だけではなく、中央と同じような仏教活動を地方で行うという多分に政治的な示威行為にも見える。イデオロギーとしての形を整えて仏教を導入したという点から、祈願・滅罪という寺院機能は、程度差はあるにせよ、地方でも当初から備わっていたものと考えべきだろう。

若狭に寺院が出現したのも、やはりこのような時期である。出土した古瓦資料の特徴から、とりあえず太興寺麿寺(小浜市)、下夕中麿寺(上中町)、興道寺麿寺(美浜町)の3カ寺が挙げられる。太興寺麿寺の軒丸瓦は複弁6葉蓮華文で、外区に雷文をもつことから大和紀寺の瓦を標識とする「紀寺式」と呼ばれる(図1)。紀寺式軒丸瓦は、畿内とその周辺の寺院跡で出土しており、北陸では南加賀地方(弓波麿寺・保賀麿寺・黒瀬窯跡)にも見受けられる。し



1・2 太興寺麁寺出土 3 若狭神宮寺境内出土 (拠『小浜市史』通史編 1992)

かし、太興寺麁寺例は、中房の3+7という蓮子構成に注目すると、南加賀とは直接つながらず、北白川麁寺・大宅麁寺などの山城の寺院との親縁関係が想定できる。太興寺麁寺の造営にあたって、かの地の豪族あるいは瓦工人が関与した可能性が大きい。一方、下夕中麁寺は軒瓦が確認されておらず、また興道寺麁寺も、軒瓦・軒平瓦が複数型式認められるものの、他地方の瓦と直接比較するのは難しい。しかし、時期的には太興寺の少し後、遅くとも7世紀末葉までに成立したことは間違いない。

これら3カ寺を造営した豪族を特定する文献は存在しない。ただ、いずれの寺院にも前時代の有力な古墳群が近接していることは、大いに注意すべきである。7世紀代の古墳動向がよくわからず、年代的にも寺院建立と開きがあるが、それでも従来指摘されている膳氏・耳氏等の系譜を引く豪族が寺院を建立した可能性は考えてもよいと思われる。ただ太興寺周辺地区では、最近になって、かつての若狭国分寺跡の発掘調査で、下層から素弁蓮華文軒丸瓦や平瓦が出土していたことがわかった。いずれも小破片だが、7世紀後半代まで溯る可能性もあり、太興寺麁寺に近接してもう1カ寺、まったく別文様系譜の瓦葺寺院が存在していたとすると、この地区では畿内さながらに、複数豪族が寺院建立を競っていたのかも知れない。

若狭の古代寺院と在地豪族との問題を考える際に、もう一つ留意すべき点がある。それは、資料の不足している下夕中麁寺以外の7世紀後葉創建寺院が、8世紀後半あるいは9世紀まで、新たに瓦を追加して造営維持活動を行っているということである。北陸の多くの寺院が比較的短期間のうちに形跡が途絶えるのに比べ、この若狭の状況は、造営主体の在地豪族の勢力交替があまり進行しなかったのか、あるいは仏教がイデオロギーとしてこの地に根付いたことを示すのか、いずれにせよ地域史上の興味深い問題をはらんでいる。

瓦葺寺院の成立事情を考える場合、残る重要なテーマは、瓦がいったいどこでどのように作られたか、ということである。短期間に大量の瓦が必要となるために、多くの場合、専門の瓦工人に加えて地元の須恵器工人も動員された。若狭では、下夕中麁寺の至近にこれに供給した

瓦窯が確認されているだけで（これ自体、丘陵の反対斜面に群集する末窯跡群との関係が問題である）、とりわけ太興寺・国分寺下層、さらに後述若狭神宮寺等への瓦供給窯が判明すると、これまで述べてきた諸問題についてもひじょうに具体的な検討材料が得られることになる。

3 国分寺と神宮寺

(1) 若狭国分寺

天平13年（743）、国毎に七重塔を造り、金光明最勝王經・法華經を写して、また天皇自ら金字金光明最勝王經を写して塔毎に埋め、僧寺を金光明四天王護国寺、尼寺を法華滅罪之寺と命名するという、いわゆる国分寺建立の詔勅が出された。国分僧寺・尼寺は、その名のとおりに、先に述べた祈願と滅罪の寺のセットである。この政策の最大の主眼は鎮護国家であったが、各国の造営事業は、その国々の事情に応じて進められ、完成にはかなりの遅速があったらしい。

若狭国分寺は、現在の国分寺（小浜市）のその場所に当初から営まれていたと従来考えられていた。小浜市教育委員会による数次に亘る確認調査によって、2町（約218m）四方の寺域の南東隅に塔を配置し、現本堂の直下に中心礎石建物が、さらにその南方に門の遺構が検出された。遺構周辺から出土する土器も8世紀後半から9世紀代のもので、これらの遺構を国分寺のものとするに問題はとりあえない。

ところでこの若狭国分寺は、特異な点が二つある。第一は、想定南大門・中門・塔の間に、国分寺古墳と称される大型の円墳（略方形で、方墳との見方もある）が遺存することである。たまたま講座の日に墳丘斜面で、平底の土師質土器片を採集したが、これ以外に年代・性格を推定する手がかりはない。古墳かどうか一応疑ってかかる必要すら感じるが、いずれにしても寺域内に巨大な土盛りを残すということは、何らかの積極的な意味があったのではないか。もし造営主体者に「いにしへの墓を残す」といった意図があったとすれば、この寺には滅罪の意識が強く働いていることになる。今後の調査でメスが入れられることを期待したい。

若狭国分寺の特異な第二点目は、瓦が葺かれていないということである。後述するように若狭を含む北陸地方では、瓦葺でない古代寺院が実際には相当あったと予想しており、一寺院という次元では十分ありえることである。前述のように下層に白鳳期の瓦葺遺構が存在したとすると、在地有力豪族が建立した一部瓦葺（？）の寺院がもともと存在し（一旦廃絶した可能性もある）、これが基本的に瓦葺でない国分寺として転用されたといった理解になりそうである。古代の屋根瓦は吸水性があり、寒冷地では凍害などにより長期間の使用に耐えなかったものと思われるので、かかる若狭国分寺跡の状況は、それほど無理な想定ではあるまい。

むしろ瓦に関して問題なのは、近くの太興寺廃寺が、奈良時代になって新たに瓦を葺いていることである。わずか1片ながら、ここで出土した複弁8葉蓮華文軒丸瓦（図2）がもつ意義は大きい。後述の若狭神宮寺出土瓦と全く同一の范型で作られたもので、注目すべきことに奈

良平城宮の第2次朝堂院（天平年間（729-49）造営説と天平宝字年間（749-57）造営説がある）に葺かれた瓦に酷似しており、同種の瓦は美作や駿河国分寺などでも出土していて、中央直結型の、しかも各地の国分寺造営に関わりの深い瓦なのである。多量に出土した平瓦の中にも、一枚作りという奈良時代の特徴を持ったものが一定量含まれ、上記軒丸瓦とセットで、ある程度の造営にあてられたものとみなしていい。いま若狭国分寺跡と奈良時代太興寺廃寺を比較すると、瓦の面で後者の方がより「国分寺的」と見ざるをえない。すでに大森宏氏が指摘しているが、太興寺廃寺が奈良時代中期に国分寺に転用された可能性もある。また、あくまで現国分寺跡が僧寺であるならば、太興寺の方が転用尼寺（転用であれば、尼寺でも白鳳期の塔があって何ら差し支えない）との見方も成り立つ。憶測はこのあたりが限界だが、ともあれ、若狭国分寺跡と太興寺廃寺は、新資料の出現によって、さらに大きな問題を今後に残すことになった。

（2）若狭神宮寺

奈良時代になると、在来の神祇信仰と仏教の融合が始まった。宿業の身の神が仏道に帰依して災いがおさまるといった「神身離脱譚」は象徴的であるが、中でも若狭彦神や気比神はその早い例として知られる。『類聚国史』天長6年(829)の項に、養老年中(717~724)のこととして、若狭彦神の神主、和朝臣宅継の曾祖赤鷹が神道を免れたいという神の願いを受け神願寺を建てたと伝える。また、『若狭国鎮守一二宮縁起』では、靈龜元年(715)に若狭彦神社が白石上に俗体で現れ、多田嶽麓に精舎が建てられ、これを神宮寺と号したとする。

このような創立伝承をもつ現若狭神宮寺ではあるが、実体としてどこまで歴史をたどりうるのだろうか。境内地から、これまでに古瓦資料が相当量出土しており、とりわけ太興寺廃寺でも出土した平城宮式複弁8葉蓮華文軒丸瓦(図3)やこれに伴う縄目叩きの一枚作り平瓦は、遅くとも奈良時代中ごろには寺院が存在したことを物語っている。成立譚の年記までにはまだ20~30年の隔たりがあるとはいえ、宇佐宮弥勒寺(大分県)と並ぶ全国的にも最初期の神宮寺の実像が見え始めたことは、若狭の古代寺院研究にとって近年で最も大きな成果であろう。なお、留意しなければならないのは、軒丸瓦文様から見て、若狭神宮寺が中央と密接なつながりの中で営まれたらしいということで、ひるがえって、一連の「神身離脱譚」の性格そのものも、若狭や越前という在地の中で生じたものではないことが暗示されるのである。そこには、各地の有力神を仏教化して地方支配をイデオロギー面でも強化しようとする中央政府の意図が見え隠れしているように思われる。

4 瓦を葺かない古代寺院

奈良時代は、これまでに見た国分寺や神宮寺といった国家政策的なものだけでなく、僧・俗両方で様々な仏教活動が展開され始めた時代でもある。すでに中国で盛行していた密教などももたらされ、呪術的能力を極めようとする修行者が増えて、民衆も彼らに個人救済を期待し

たようである。彼らの多くは山中で修行し、里へ下りては教化活動を行った。そして、その活動の場は、必ずしも白鳳時代的な瓦葺の伽藍である必要はなかった。

もともと北陸は、瓦葺古代寺院の分布密度が低いところである。平安時代に入ってしばらくすると、瓦そのものが消えてしまい、それだけ見ると寺院がすべて消滅してしまったかのような錯覚に陥ることになる。しかし実際には、瓦葺でない寺院がそこかしこに存在していたのは間違いなく、瓦生産が途絶えることと古代仏教寺院の消長は基本的には別問題なのである。多雪寒冷地帯という気候風土にあって、素焼の瓦は凍害にすこぶる脆弱であるという理由から、一時期汎日本的に展開した瓦葺寺院という形では、存続が困難であったというにすぎない。

若狭の場合、縁起によれば、多田寺が天平勝宝元年（749）、妙楽寺が延暦16年（797）に成立したとされ、平安時代前期までに羽賀寺・谷田寺・明通寺などが創立したとされる。これらの寺院縁起が、別の確実な資料で証明さるべきものであるのは当然だが、例えば地方色濃厚な9世紀の薬師三尊像として周知の多田寺本尊などは、そのまま寺院の歴史を物語ると考えてよいであろうし、これらの寺院のいくつかは、可能性として奈良時代あたりまで溯ることを考えていくのも意味無しとはいえない。

高浜町牧山は、弘法大師が真言寺院一乗寺を創建したとの伝承を残すが、標高400m余りの山頂周辺では、平安時代中～後期の土器片が採集されており、東の登山口にあたる金蔵寺に平安時代末ごろの地藏菩薩立像が残ることから見ても、この一帯が古代まで溯る仏教信仰空間であったことが多分に予想される。若狭には山中寺院がまだまだ多く存在していたものと思われ、伝承や出土遺物、平坦面地形の存在、仏教遺品の遺存などを手がかりとして調査を進めていけば、かなり具体的に古代寺院の展開が追えるであろう。さしあたって、高浜町青葉山周辺や美浜町大日開拓地周辺などが有力候補地としてあげられる。

おわりに

若狭の古代寺院は、総体に息の長い寺が多いようである。白鳳時代、あるいは奈良時代に成立した寺院が意外に長く存続し、場合によっては現在まで続いているところもあるようで、越前などとはかなり異なった特徴かと思われる。若狭は、祈願・滅罪道場としての仏教寺院が、より純粋な形で展開したのかも知れない。しかし、その一方で、国家や在地有力者層と絶えず関係もちながら展開したのもまた事実である。

近年の新資料出現により、若狭の古代寺院研究は、新たな展開の可能性が見えてきている。今後より正確な評価を行うために、ともかく徹底した現地調査を行うことが肝要であろう。

若狭地方の新発見の前方後円墳

福井県立若狭歴史民俗資料館

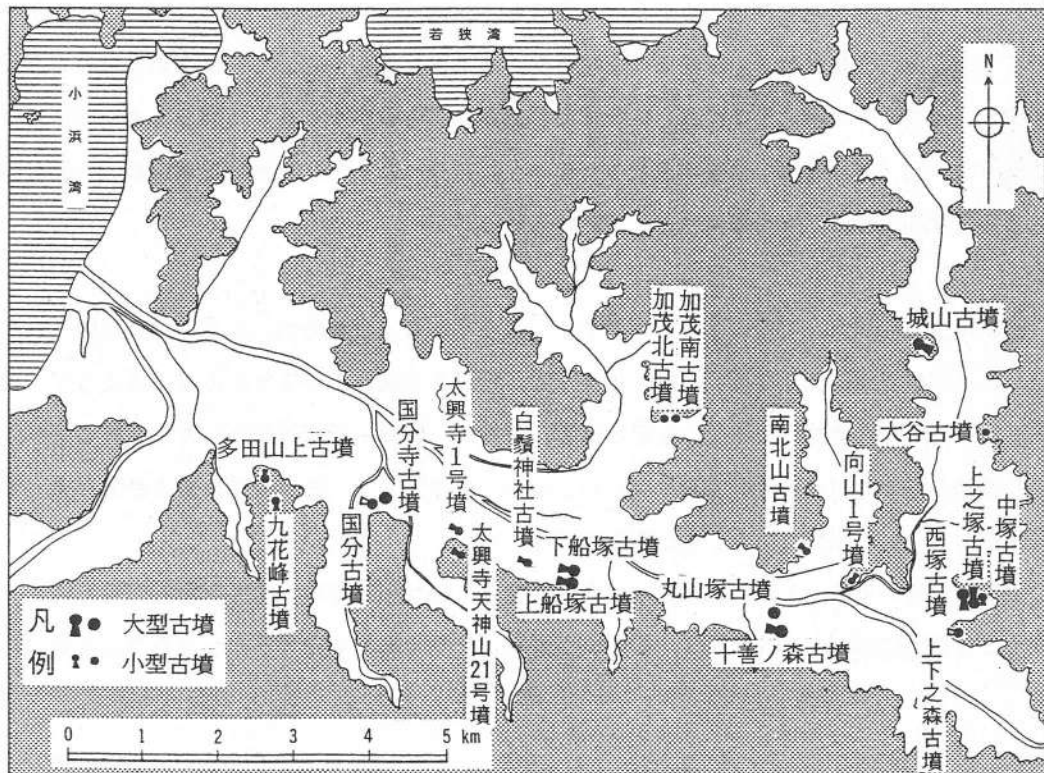
はじめに

近年、若狭地方では数基の新たな前方後円墳の存在が判明した。そのうち一部については、今春刊行された『小浜市史』(通史編上巻, 1992年)に既に紹介されている。そこで、それ以外の新たに確認された前方後円墳、ならびにその可能性が強い例、各1基を紹介しておきたい。

1 南北山古墳

遠敷郡上中町堤の集落に南接し南東方にのびる丘陵先端頂部に所在する。これまで古墳の存在自体は知られていたが、1992年5月踏査し、新たに帆立貝形前方後円墳であることを確認しえた。前方部は高所に位置して北西面し、後円部を平野側の南東方に向ける。未測量のため正確を期しがたいが、参考までに略測値を記述すれば、全長約30m、後円部径約24m、同高約5m、前方部長約6m、同高約3mを測る。丘陵傾斜面に造営されている古墳の常として、墳丘基底面は斜面をなす。後円部と前方部の比高は、0.5m余前方部が高い。段築・葺石・埴輪などの外部諸設備の有無は、現状では確言しえない。

当古墳は築造時期を特定する明確な根拠をもたない。谷を挟んだ東方には先年発掘調査され



上中古墳群における主要古墳分布図(縮尺1/100,000, 若狭歴史民俗資料館平成4年度郷土史講座資料掲載図に追加)

むかいやま
た向山1号墳が対峙しているが、いわゆる上中古墳群内ではこの向山1号墳のように小型前方後円墳でも葺石や埴輪などを有する例も混在する。むしろ、南北山古墳にはなんら外部設備を確認しえない点に、時期的な特徴が顕在している疑いが残る。

2 上下之森(脇袋丸山)古墳

遠敷郡上中町脇袋の丘陵先端部に所在する。上田三平は、『福井県史蹟勝地調査報告 第1冊』で、脇袋7塚の1つとして上下之森古墳についてもふれ、「上下之森は曾て学校敷地たりしことあり其節発掘せしに古鏡及び刀剣多数発見せし由なるも今は傳はらず」記述している。この記述と、かつて当古墳に隣接して学校が存在したという地元の人との話が合致する。よってここでは、当古墳を上下之森古墳として報告する。

1990年、外部設備を備えた顕著な円墳が存在するとの教示をえて踏査を実施した。事実、墳丘は一見円墳の感がある。ただ、墳丘南部が掘削されており、しかも古墳の立地する丘陵が西方にのびていて、稜線に直交する形の南北溝が古墳から西方にやや離れて存在する。ゆえに、後円南部が大幅な掘削を被り、改変のためくびれ部が不明瞭になった、変形の激しい帆立貝形前方後円墳ではないかと推定した。墳形の確定は発掘調査を待たざるをえないが、段築・葺石・埴輪の3種の外部設備を完備する古墳は、若狭ではそのほとんどが前方後円墳である。また、豊富な副葬品出土の伝承、前方後円墳とすれば十善ノ森・上船塚・下船塚・白鬚神社・太興寺1号(鷲塚)等の北川南岸域に散在する各前方後円墳と同様に西面すること、などの条件は前方後円墳である可能性を補強する。

はたして前方後円墳にまちがいないとすれば、平野側に西面する前方部をそなえ、後円部がより高所に位置することになる。また、前述のように前方部の前端には稜線と直交する形の溝が西接する。やはり未測量のため正確を期しがたいが、参考までに略測値を記述すれば、全長約57m、後円部径約43m、同高約6m、前方部長約14m、同高約3mを測る(計測には上中町教委・永江寿夫氏の協力をえた)。墳丘は2段築成で、葺石・埴輪を備える。埴輪は川西宏幸編年のIV期に相当する。すなわち、当古墳は5世紀の築造である。そうであれば、今後、5世紀代の城山古墳から西塚古墳にかけての大型前方後円墳(大首長墓)との並行関係や、向山1号墳・太興寺1号墳などの小型前方後円墳との先後関係に興味が引かれる。(中司照世)

付記

その後、本(1992)年7～8月、小浜市太興寺天神山古墳群で同21・22号墳の発掘調査が実施された。その結果、太興寺天神山21号墳は全長約13mの小型帆立貝形前方後円墳であることが判明した。供献の須恵器片若干が出土しており、未整理のため特定しがたいが、陶邑編年のTK47型式に相当する可能性が強く、5世紀末ないし6世紀初めに属す。詳細は、小浜市教育委会『太興寺天神山古墳群21・22号墳発掘調査現地説明会資料』1992年、を参照されたい。

特別展 中世若狭を駆ける —若狭武田氏とその文化—

会期10月6日(火)~11月8日(日) 月曜休館(一般400円,高・大生300円,小・中生200円)

武田氏は、源義光(新羅三郎義光)を初祖と仰ぐ武家の名門で、平安時代後期に甲斐国に定住し、鎌倉幕府によって甲斐国守護職となり、承久の乱後は安芸国守護をも兼ね、室町時代になると甲斐より安芸武田氏が分流しました。その後、安芸の武田信繁の子・信栄は、永享十二年(1440)、將軍義教の命を受けて若狭守護一色氏を討って若狭国守護職を拝領し、若狭武田氏の祖となりました。

以後、二代信賢、三代国信の時に戦国大名になりうる基盤を築き、五代元光は後瀬山に広大な山城を完成させましたが、都の大乱や国内情勢の影響を強く受け、八代元明をもって140年余にわたって若狭を統治した若狭武田氏も歴史からその姿を消しました。

しかし、若狭武田氏の歴代は、初代以来率先して京都との密接な交流を開いて公家・僧侶な



ど当時を代表する文化人との関係も深め、一族からも潤甫周玉、春沢永恩、文溪永忠、英甫永雄など多数の禅僧を輩出し、武家故実や和歌・連歌などその優れた文化活動の証となっている文芸の数々が生みだされました。また一方で、若狭伝来の芸能等を振興するなど、今日の若狭に残される文化的な土壌を培ったとさえ考えられています。

この特別展では、こうした若狭武田氏の事跡や出身禅僧などの文芸、さらには庶民の暮らしを語る資料を展示し、中世後期の若狭の状況の一端なりとも紹介できればと考えています。

(芝田寿朗)

編集後記 このたび若狭地方を中心とする文化財関係の情報を、より広い地域の人々に少しでも早く提供するため、『若狭歴史だより』を刊行することになった。創刊号を飾り、今回は京都国立博物館の久保智康氏に昨年度の発表要旨を執筆頂いた。また、踏査速報を掲載した。今後、内外の多くの方々にこのミニ誌の利用をお願いしたい。(N)

若狭歴史だより 創刊号

発行所 福井県立若狭歴史民俗資料館

〒917-02 小浜市遠敷2丁目104番地

TEL 0770-56-0525

発行日 平成 4年 10月 1日